

幕末明治の写真師列伝 第十一回 下岡蓮杖 その十

ほどなく久之助（蓮杖）はウィルソンの元から出ることになるのだが、どうやらそれはウィルソンが久之助の借りていた家屋を他のものに貸し与えたいことから、おそらくは出て行って欲しいと久之助はウィルソンに言われたのであろう。（註：参考文献 斎藤多喜夫「横浜居留地成立史の一齣～横浜在留米人ショイヤー貸家徴還一件～」『横浜開港資料館紀要』一三号、1995年）そこで仕方なく久之助は横浜の戸部で長屋を借りて住むことになった。どうやら久之助が最初の妻・美津を娶るのもこの頃のようなのだ。久之助はここでウィルソンが調合し残した薬品を使って現像処理を行い、写真研究を続けることになるのだが、うまくいかない。そのうちにウィルソンが調合し残した薬品も無くなってしまったことから、新たに化合前の原料となる薬品を買い求めてみたものの、ウィルソンはそれらの薬品の調合の仕方やそれぞれの分量を詳しく教えてくれなかったため、ほとんど困ってしまった。そこで宣教師 S.R. ブラウンの娘、ラウダーを訪ねて、教えて貰おうと考えたのだが、あいにくラウダーもすでに帰国してしまったため、それもできなかった。さらに独力で薬品を調合し、写真撮影を何度も試みてみたが、うまく写すことができない。そうこうするうちに月日もたって、下田関係の親族や知り合いからの借金もとうとう二百五十両になってしまった。

この頃の逸話としては、資金が乏しかったため、戸部の長屋の雪隠（トイレ）を暗室代わりに使用していたため、家主に怒られてしまい、それで仕方なく暗室代わりと

なる屋台を購入して、使い勝手のよいように自分で改造し、苦勞したと伝わっている。また種板となるガラス板もすでに横浜に外国から輸入されてはいたのだが、それもカメラに収まるような適当な大きさにするには、専用のガラス切が必要となる。しかし、それをきれいに裁断するためのダイヤモンドの歯先のガラス切が高価なため、久之助には購入することができず、ショイヤー夫妻のところにあった専用のガラス切を借り受けてガラスを切断するため、度々、ガラス板を持って、ショイヤー夫妻のところに行かねばならなかった。しかも、一回、百文の使用料も必要だった。このような苦勞を一年ほどもし続けているうちに、とうとう薬品もその量が少なくなってしまい、あと数度しか使えない状態になってしまった。久之助は痩せ衰え、憔悴しきっていた。

そんなある日の夕方、久之助は苦勞を共にする妻・美津に、「今や我が家は赤貧洗うがごとくとなってしまった。負債も日に日に膨らみ、それでもまだ写真術を完全に習得できてはいない。もし明日も試みてうまく写すことができなかつたならば、俺はおまえと共に夜逃げするばかりだ」と、悄然として呟くばかりであった。

妻・美津もそんな久之助に、「たとえ乞食となったとしても、再び写真術に心を労することのないように」と諫めてはいたのだが、今はもう百方手を尽くすこともできなくなって、号泣する久之助の姿を見れば、ただ一緒に泣きつくすばかりであった。

（森重和雄）